

# 第3回家康公検定 副読本

## 序 德川家康公に学ぶ

重き荷を負い、遠き道を歩いた最期の言葉

1 「遺訓」から

2 「遺言」から

### I

## 家康公の人間的成長

若き日、波乱万丈の経験を乗り越える人間形成

3 生誕の時

9 三河一向一揆

4 駿府での高等教育 えほし

10 飛躍への布石

5 今川義元自らが「烏帽子親」に

11 三方ヶ原の敗戦—家康公大きな転機

6 若年に似合わず

12 影の立役者二人—長篠の合戦

7 慎重な判断—大高城脱出と岡崎城入城

13 心に深い傷を残した「信康事件」

8 織田信長との同盟

14 「神君伊賀越え」の驚異

### II

## 天下人への過程

戦いの中で大きく視野を広げ、天命に至る時

15 五カ国大名に

はっさく  
19 八朔

16 野戦に強い徳川軍一小牧・長久手の合戦

20 武士のあり方とは—学問重視の狙い

17 動かぬ家康公—秀吉の一手

21 「決断」と「賭け」—関ヶ原の合戦

18 戦国の暮らしを変える一家康公の郷村支配

### III

## 天下泰平の国づくり

戦争のない平和な日本、そのカタチを求めて

22 慶長小判の意味

27 善意の遺産「洋時計」

23 「駅伝」の始まり—宿駅伝馬制度

28 最後の戦い—大阪の陣

24 国益を守る外交

29 けんなんさんぶ 元和偃武と武家諸法度

25 信を通わせ—朝鮮通信使

30 平和を創る、国を守る

26 立派な君主とは—林羅山との問答

—神となった家康公

# 年表

## 家康公の生涯

天文 11	1542	1 歳	12月26日、岡崎城にて誕生。幼名 竹千代。 父は松平八代 広忠、母は刈谷城主 水野忠政の娘 於大
天文 13	1544	3 歳	今川方の水野氏が織田方となり、母 於大が離縁される
天文 16	1547	6 歳	今川の人質に向かう途中、田原 戸田氏の裏切りにより 織田の人質となる。
天文 18	1549	8 歳	父 広忠が暗殺される。人質交換で駿府に。今川氏の人質となる。
弘治元	1555	14 歳	元服し、松平元信を名乗る。
弘治 3	1557	16 歳	関口義広の娘（後の築山殿）と結婚。
永禄元	1558	17 歳	初陣で三河寺部城を攻略。元康と改名。
永禄 2	1559	18 歳	長男 信康誕生。
永禄 3	1560	19 歳	桶狭間の合戦で今川義元戦死。菩提寺の大樹寺に入り、登普上人より 厭離穢土 欣求淨土の言葉を授かる。岡崎城に帰還。
永禄 4	1561	20 歳	織田信長と和睦。三河平定に着手
永禄 5	1562	21 歳	織田信長と清州同盟を結ぶ。
永禄 6	1563	22 歳	家康と改名。三河一向一揆勃発。
永禄 7	1564	23 歳	三河一向一揆を収め、三河を平定。
永禄 8	1565	24 歳	家臣団再編（三備の制）。
永禄 9	1566	25 歳	徳川への復姓を勅許され従五位下 三河守に叙任。徳川家康を名乗る。
永禄 10	1567	26 歳	長男 信康が信長の娘 徳姫と結婚。
永禄 11	1568	27 歳	武田信玄の駿府侵攻に合わせ、遠江侵攻。
元亀元	1570	29 歳	姉川の合戦。織田・徳川軍が浅井・朝倉軍を破る。 岡崎城を信康に譲り浜松城に移る。
元亀 3	1572	31 歳	三方ヶ原の合戦で武田信玄に惨敗。
天正 3	1575	34 歳	長篠の合戦で織田軍とともに武田軍に大勝。
天正 7	1579	38 歳	三男 秀忠誕生。妻 築山殿、長男 信康自害。
天正 9	1581	40 歳	武田方の高天神城奪還、遠江平定。

# 年表

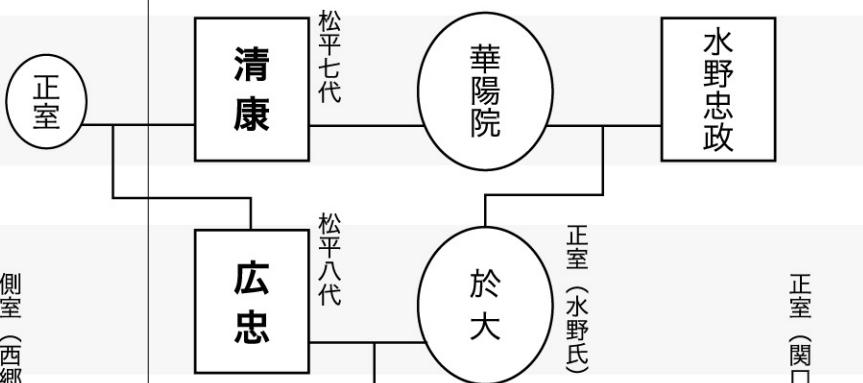
## 家康公の生涯

天正 10	1582	41 歳	武田氏滅亡。駿河を領有し三ヶ国の大名に。本能寺の変。 伊賀越えて岡崎に帰還。
天正 12	1584	43 歳	羽柴秀吉と小牧・長久手の合戦。
天正 14	1586	45 歳	豊臣秀吉の妹 朝日姫を娶り、秀吉に臣従。浜松城より駿府城に移る。
天正 17	1589	48 歳	五ヶ国總撫地。七ヶ条の定書を発令。
天正 18	1590	49 歳	秀吉と小田原北条氏を攻略。関東移封、江戸城に移る。
文禄元	1592	51 歳	文禄の役（秀吉による朝鮮出兵）。肥前名護屋城に滞陣。
文禄 2	1593	52 歳	江戸にて藤原惺窓から朱子学を受講する。
慶長 3	1598	57 歳	秀吉死去。朝鮮出兵からの即時撤退を命ずる。
慶長 5	1600	59 歳	会津 上杉征伐。伏見城の戦い。関ヶ原の合戦で石田三成ら西軍に勝利。
慶長 6	1601	60 歳	街道整備、伝馬制。伏見に銀座設置、金銀貨幣鋳造。朱印船貿易制度化。
慶長 8	1603	62 歳	征夷大將軍となり江戸に幕府を開く。
慶長 9	1604	63 歳	家光誕生。糸割符制の導入。
慶長 10	1605	64 歳	朝鮮国との国交回復。將軍職を三男 秀忠に譲る。
慶長 12	1607	66 歳	駿府城に移り、平和社会建設に向け大御所政治を始める。
慶長 14	1609	68 歳	通貨の交換基準を定める。オランダ商館を開設。
慶長 15	1610	69 歳	名古屋城の築城。スペインとの通商を始める。
慶長 16	1611	70 歳	スペイン国王使節を駿府城にて謁見。
慶長 17	1612	71 歳	禁教令を発令。
慶長 19	1614	73 歳	方広寺鐘銘事件。大坂冬の陣。
慶長 20	1615	74 歳	大坂夏の陣、豊臣氏滅亡。
元和元	1615	74 歳	元和偃武を宣す。武家諸法度、禁中並公家諸法度の発令。
元和 2	1616	75 歳	太政大臣叙任。4月17日、駿府城にて薨去。久能山に埋葬される。

# 家康公を取り巻く家系図

祖父の代から孫の代<概略版>

祖父母



父母

妻  
(秀忠の母以外の側室は除く)

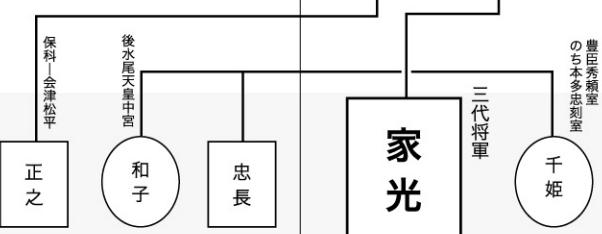


子 (側室の産んだ女子は除く)



孫

(嫡孫のみ。長男、次女～四女を除く)



# 家康公の生涯

家康公の志と天下泰平の国づくり

はじめに

元和 2 年 (1616) 4 月 17 日、徳川家康公が薨去されて 400 年。その偉大な生涯を顕彰して各地で数々の企画が進められております。

岡崎市、浜松市、静岡市が連携して開催してきた「家康公検定」も大詰めです。

今回のテーマは「家康公の生涯 家康公の志と天下泰平の国づくり」、それは人間、家康公の全容を俯瞰しながら、求めた泰平国家のカタチを顕彰してその後の日本、さらに現代への示唆を皆さんと考えようと思うものです。

江戸 265 年の泰平を閉じ、明治の近代国家に変わってわずか 27 年で日清戦争、37 年で日露戦争、74 年で太平洋戦争に突入して悲惨な大敗戦。

悲嘆の中、作家、山岡荘八氏は戦後の日本人のテーマは「戦争と平和」でありたく、その主題こそ「徳川家康公に学ぶこと」の決意で大作「小説・徳川家康」全 26 卷を書き上げ、戦後、多くの日本人の心の中に家康公を蘇らせました。

この副読本では、序章「徳川家康公に学ぶ」で生涯の言葉、遺訓と遺言を取り上げ、第 1 章「家康公の人間的成長」で幼、青年期の成長を顧み、第 2 章「天下人への過程」で国家を視野に入れた志、第 3 章「天下泰平の国づくり」で平和国家江戸時代の基礎を学びます。

本誌では 30 項目の小さな物語にまとめていますが、誌面を越えて家康公の人間像、求めた泰平国家像が皆様の中で語り継がれるきっかけになれば幸いです。

家康公 400 年忌の今年は日本の戦後 70 年。歴史の中の今を、家康公とともに考えてみたいものです。

# 序

## 徳川家康公に学ぶ

重き荷を負い、遠き道を歩いた最期の言葉

苦難を乗り越え、人間成長して泰平国家を築いた人生の最期、家康公の「遺訓」と「遺言」は私達に深い思想を遺しました。家康公に学ぶならこの言葉を深く心に刻みたいものです。

### 東照公遺訓

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし。いそぐべからず。不自由を常と思えば不足なし、ここに望みおこらば困窮したる時を思い出すべし。堪忍は無事長久の基、いかりは敵とおもえ。勝つ事ばかり知りて、まくることを知らざれば害その身にいたる。おのれを責めて人をせむるな、及ばざるは過ぎたるよりまされり。

### 家康公遺言

わが命旦夕に迫るといへども、將軍斯くおはしませば、天下のこと心安し、されども將軍の政道その理にかなはず億兆の民、艱難することあらんには、たれにても其の任に代らるべし、天下は一人の天下に非ず天下は天下の天下なり、たとへ他人天下の政務をとりたりとも四海安穏にして万人その仁恵を蒙らばもとより、家康が本意にしていさかもうらみに思うことなし

## 1 「遺訓」から

「遺訓」は人間としての生き方を説いていますが、よく読んでみると自身の人生から体得した内容が散りばめられ、私たちへの戒めとして受け取ることができます。

「急ぐべからず」は「短慮に走るな」という意味でしょう。よくよく考えて行動せよと説いています。

「不自由を常」と言っているのは、人質時代の体験から、常に堪忍と質素儉約を心がけた生き方の出発点であると考えます。

「堪忍は無事長久の基 怒りは敵と思え」。このくだりは家康公が乗り越えた数々の苦難を彷彿とさせる部分です。家康公の生涯で堪忍することを強いられた出来事や、その後の人間的成长を見直してみたいと思います。

「勝つことばかり知りて負くることを知らざれば」とは具体的にどのようなことを指し、なぜ「害その身に至る」のでしょうか。このことは家康公自身のことではなく、周囲のリーダーたちから学んだ教訓とも考えられます。信長や秀吉の長所や短所をどのように見ていたのでしょうか。そしてどのようなことを自身の教訓として活かしていくのでしょうか。

最後に「及ばざるは過ぎたるより勝れり」。この言葉の意味は大変重いと思います。保身的な内容と捉えるのではなく、「必要以上の物を求め過ぎない」ように生きることの大切さを説いていると考えたいものです。

以上の観点から家康公の生涯をさらに詳しく、具体的に見直してみたいと思います。

## 2 「遺言」から

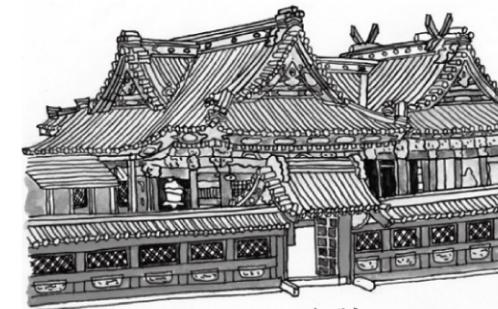
「遺訓」は人間としての生き方を示し、諭していますが、「遺言」は国家を治める者としての心得を示しています。

「將軍の政道その理にかなわず」というのはどのような「理」を言うのでしょうか。家康公の国づくりの根幹にかかる部分です。250年余の平和社会実現の大きな土台を考えてみたいと思います。

「天下は一人の天下に非ず 天下は天下の天下なり」。有名なくだりです。この文言は、林羅山との問答から得たもので、「六韜（中国の兵法書のひとつ）」に記されています。味わい深いこの言葉の意味を家康公の具体的な政策から考えてみます。

「遺言」からは家康公の「天下泰平の国づくり」について、その具体的な内容を学んでみたいと思います。

家康公四百年祭（400回忌）に当たる今回の「家康公検定」は、「遺訓」と「遺言」を手がかりに家康公の生涯を学ぶ機会にしたいと考えています。この副読本を参考に、さらに家康公から何を学ぶのか深めていただければ幸いです。



絵：柄澤照文

「埋葬された久能山」後の東照宮  
(静岡市)

# I 家康公の人間的成長

若き日、波乱万丈の経験を乗り越える人間形成

## 3 生誕の時

天文 11 年（1542）12 月 26 日早晩、寅年、寅の刻（午前 4 時頃）、岡崎城内に大きな産声が響き渡りました。竹千代、後の徳川家康公の誕生です。父は松平広忠、母は於大の方。二人ともまだ 10 代半ばという若さでした。この時の様子を伝える絵巻物が『東照社縁起絵巻』です。産屋となつた坂谷邸では、父親の広忠が嬉しそうに赤ん坊の家康公を抱いています。縁側では重臣の石川清兼は魔除けの矢を放ち、酒井正親（政家）が胞衣刀を大事そうに抱いています。城内が喜びに満ちていた様子が伝わってきます。

この頃、松平一門の離反が相次ぎ、西から尾張の織田信秀が、東から松平家が頼る駿河の今川義元が岡崎の地で激突する、「小豆坂の戦い」が起きます。岡崎城は最大の危機の中、正にこの年、家康公は誕生しました。

武田信玄 21 歳、上杉謙信 12 歳、織田信長 8 歳、豊臣秀吉は 6 歳。海のかなたは明の時代。

世界が動き出し、ポルトガル船が種子島に漂着し、鉄砲が日本に伝來したのもこの頃です。

『東照社縁起絵巻』



## 4 駿府での高等教育

母・於大の実家である水野家が今川方から織田方についてたため、父・広忠が於大を離縁したのは竹千代 3 歳の時でした。そして 6 歳になると人質として今川家へと送られることとなります。ところが途中、田原城主 戸田康光により、尾張の織田家へと送られてしまいました。その後の安城合戦で今川方が織田信長の兄・信広を捕らえると、人質交換が成立し竹千代は織田家から解放されますが、岡崎に戻ることは出来ず、駿府へと送られてしまいました。

8 歳になった竹千代の養育、手習いの相手をしたのは源応尼。死後は華陽院といい、母、於大の方の母親であり、竹千代の祖母です。この時期の愛情が人間味を育てたものでしょうか。

さらに駿府の今川義元は、太原雪斎を竹千代の教育者にしました。今川家の内政・外交・軍事の全てに大きく貢献し、幼き義元の教育をも行っていた名僧で、竹千代のこの時期の人格形成がのちの天下人、家康公の骨格となったものと思われます。

「民 信無くば立たず」と『論語』の言葉などを通じて人間形成がはかられたのでしよう。

雪斎が住持を務めた臨済寺（静岡市葵区）と清見寺（静岡市清水区）には家康公手習いの間が今も残ります。



「太原雪斎木像」  
(臨済寺／静岡市)

## 5 今川義元自らが「烏帽子親」に

竹千代は岡崎松平氏のプリンスとしての待遇を受けていたと考えられます。雪斎禅師による高等教育に加えて、13歳で「攘甲の礼（跡目継承の式）」を執り行い、晴れて松平九代目となりました。

元服の式では今川義元自らが「烏帽子親」となり、名を元信と改めさせてその成長を祝福しました。義元の期待の大きさが窺えます。

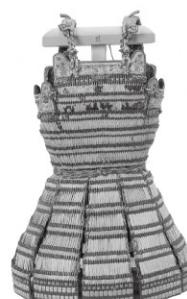
## 6 若年に似合わず

元服をした翌年の弘治2年（1556）、元信は今川義元に願い出て、父祖の墓参のため岡崎への一時帰国を果たしました。元信は喜びに沸き立つ岡崎の家臣団に迎えられ、岡崎城に入城しますが、今川家の城代である山田新右衛門に遠慮をして本丸には入らず二の丸に入ったのです。

「それがしは未だ年少のことなれば、よろず新右衛門の意見をも受くべきなり」

この話を聞いた義元は「この人若年に似合わぬ思慮の深きことよ」と深く感じ入ったと伝えられます（『岩淵夜話別集』）。

「竹千代腹巻」（浅間神社／静岡市）  
「攘甲の礼」  
(松平家当主の跡目を継承する儀式)  
の際、今川義元により贈られた腹巻。



## 7 慎重な判断 一大高城脱出と岡崎城入城

19歳の青年に成長した元康（元信から改名）は、今川義元軍の先陣として桶狭間の合戦に出陣しました。ここでは敵の砦に囲まれて孤立していた大高城（名古屋市緑区）に兵糧を搬入するという、大変危険な任務を果たしたのです。

ところが大将の義元が信長によって討たれると、今度は大高城にいた元康が孤立してしまいました。その一報を聞いた家臣たちは、「すぐに城からの退却を」と進言します。しかし元康は慌てて動こうとはしませんでした。

「敵の間者による浮説（作り話）であるかもしれません。ここは確かな情報を受けてからでも遅くはない」

この後、伯父の水野信元（於大の兄）からの情報を得た元康は無事大高城を脱出、大樹寺（岡崎市）に入ることに成功しました。ここで登壇上人から「厭離穢土 欣求淨土」の言葉を授かった元康でしたが、すぐには岡崎城に入ろうとしませんでした。城には未だ今川家の将たちが残っていたからです。

数日後に今川の将たちが撤退するのを見届けた元康は、「捨てた城なら拾おう」（『三河物語』）と高らかに宣言し、堂々と入城しました。武田信玄が、「元康は武道分別両方達したる人也」（『甲陽軍鑑』）と褒めたと伝わります。

「金陀美具足」（レプリカ）  
久能山東照宮に保管される。  
家康公が大高城への兵糧入れを行った際に着用していたと伝わる。



## 8 織田信長との同盟

永禄3年（1560）、岡崎への帰還を果たした元康はすぐ  
に加茂郡（豊田市）の挙母城や伊保城など、織田方の諸城  
を攻めました。すばやい元康の動きに危機感をもった刈谷  
城の水野信元は、信長に元康との停戦を進言。永禄4年正月、  
元康と信長の間に和睦が成立しました。

さらに松平一族内のリーダーの立場から、戦国大名としての自立を目指す元康は、今川氏の影響から離れ三河の支配権を確立してゆきます。

自立への覚悟と行動の早さに逸材ぶりが見えます。

一方、尾張の信長も美濃の攻略を目指しており、東からの憂いを無くす必要がありました。ここで元康と信長は互いの利害が一致、永禄5年（1562）の正月には元康が信長の清洲城に赴き、「清洲同盟」が成立します（『武徳編年集成』）。

この軍事的な盟約は、後に信長が將軍足利義昭らの画策によって不利な立場に立たされる危機の時期も破られることなく続きました。浅井・朝倉の連合軍と戦った姉川の合戦や、武田勝頼と戦った長篠の合戦など、歴史を大きく変えるような戦いに臨み、その同盟が功を奏します。

時には正室築山殿、長男信康の生害事件など、信長から無理難題を押し付けられ、家康公にとって厳しい試練を強いられることもありました。しかし本能寺の変で信長が亡くなるまで、21年もの間この同盟関係を守り続けた律儀、信用が、家康公の天下平定への土台作りとなったのです。

## 9 三河一向一揆

「元康から家康へ」、改名した永禄6年（1563）、足下から家臣団を三分する大事件が勃発しました。三河一向一揆です。

もともと西三河では真宗の勢力が強く、特に土呂（岡崎市福岡町）の本宗寺を中心とする真宗本願寺派の本證寺（安城市野寺町）・上宮寺（岡崎市上佐々木町）・勝巖寺（岡崎市針崎町）の「三河三ヶ寺」がその勢力を拡大していました。家康公の父広忠もこれらの寺院に「不入権」（勝手に寺内に入ることを禁ずる権利）などの特権を与えてきました。松平氏の家臣たちも多くがその熱心な門徒でした。

家康公は西三河への支配権を拡大しようとしていた時期、兵糧などが不足しがちになっていたと思われます。一揆のきっかけは家康公の家臣が上宮寺の不入権を侵害し、強制的に兵糧米を持ち去ったこと（別説あり）でした。この戦いで石川一族、本多一族、鳥居一族など多くの家臣が敵味方に分かれて戦うことになってしまいました。

翌、永禄7年に入り、一揆側の勢いも弱まると、大久保氏の仲介で和睦交渉に入りました。家康公は一揆側の様々な条件を受け入れますが、ただ首謀者の助命のみには難色を示していた時、家康公を説いたのが長老である大久保忠俊でした。

「寛容な心を持って味方を増やし、未だ歯向かう敵を鎮圧するべきである」（『三河物語』）  
上和田の淨珠院において和議が成立しました。

宗教の深さと怖さを学び、また門徒武士たちは一層の忠節を励むことになりました。

## 10 飛躍への布石

三河一向一揆を乗り切り西三河の領主権を得た家康公は、永禄8年(1565)に吉田城(豊橋市)と田原城(田原市)を攻略、永禄9年には牛久保城(豊川市)の牧野氏を帰順させ遂に三河の大半を統一します。同年、源氏の一族である新田氏から連なる徳川復姓と從五位下・三河守叙任が朝廷より許され、ここに松平家康改め、戦国大名「徳川家康」が誕生。今川や武田と並ぶ源氏姓を得たことで、武士のリーダーとしての立場を整えました。

家康公は他の松平一門には徳川姓の使用を許さず、一族であっても松平は徳川家の家来であるカタチをつくっていきます。

これは「三備」と呼ばれる当時の家臣団編成にあらわれており、東三河は酒井忠次、西三河は石川家成(後に甥の数正)が旗頭となって、その配下に他の三河武士団とともに松平一族が置かれています。

軍制を再構築し、三河三奉行(高力清長、本多作左衛門重次、天野康景)の設置などで内政の充実を図った家康公は、永禄11年(1568)、武田信玄の駿河侵攻に合わせ、今川領の遠江に侵攻。翌永禄12年、今川義元の嫡男氏真が籠もある掛川城を落とし、戦国大名、今川氏は滅亡します。

遠江の領国化と信玄対策を進めるため、元亀元年(1570)、家康公は引馬の地を浜松と改め、新たに浜松城を築城し、岡崎から本城を移しました。戦国大名としての飛躍をかけて、いよいよ武田信玄との対決です。

## 11 三方ヶ原の敗戦—家康公大きな転機

無理な戦で多くの家臣を失い、反省し、戒めとして描かせた31歳の肖像画「しかみ像」。それが何を物語るのか。

失敗、挫折は人生に付きもの。家康公はこれを座右に置き冷静さを保ったと伝わり、地道に慎重に、隙のない人生を歩いた事が伺えます。

織田信長が京都で力を伸ばそうとしていた時、東では北条氏康が亡くなり、北条、上杉、武田の力の均衡が崩れたすき、信玄は石山本願寺や将軍、足利義昭らと連動して織田信長排除の出兵を決意したと考えられます。

信長と同盟を結んでいた家康公は、この時もその盟約を破ることなく、戦国最強と謳われた武田勢を迎討とうと立ち上がりました。

緒戦の一言坂の合戦では本多忠勝らの活躍などで難を逃れましたが、三方ヶ原本戦では無理な出陣が災いし、信玄の術中にはまり、家康公の身代わりとなって討ち死にした夏目吉信を始め、多くの優秀な家臣たちが命を落としました。

大久保忠世、天野康景らによる犀ヶ崖の夜襲で一矢を報いますが、犠牲は大きく、家康公の生涯にわたる悔恨の深さを「しかみ像」が雄弁に語っています。



「しかみ像立体像」  
(浜松市)

## 12 影の立役者二人—長篠の合戦

長篠の合戦とは長篠城をめぐる攻防戦に他なりません。武田方から徳川方についた奥平貞昌（後に信昌）が守る長篠城を、武田勝頼が奪い返そうとした戦いでした。

天正3年（1575）5月、武田勝頼は1万5000の兵を率い、わずか500の兵で守る長篠城を取り囲みました。豊川の上流である寒狭川と宇連川の合流地点に築かれていた長篠城は容易には落城しませんでしたが、それでも兵糧蔵を焼かれると次第に敗色が濃くなってきました。ここでおよそ60キロの山道を走り、岡崎城にいた家康公に長篠城の窮状を訴え、城に戻る途中で武田方に捕まり、磔にされながらも援軍の来ることを伝えた鳥居強右衛門の話は有名です。

必死に脱出して窮状を家康公に伝えた強右衛門、その緊迫感を受けて立つ家康公。奥平勢を救うリーダーの責任感が燃え、盤石の織田・徳川の連合軍は設楽が原に陣を構えて、有名な鉄砲隊の活躍による戦いが始まりました。

本戦では、酒井忠次の優れた戦術眼と聞き流す信長の戦術機密保持など、戦場の駆け引きが繰り広げられます。

忠次は城の背後にある鳶ノ巣山砦を夜間に急襲して占領しました。これによって武田方は退路を断たれ、徳川・織田連合軍は戦いを有利に展開する事ができました。

「酒井忠次には10の眼がついている」（『三河物語』）

戦後に信長が忠次を褒めた有名な言葉です。

三千挺の鉄砲の威力もさることながら、二人の「影の立役者」がいて、ここから乱世平定の道が開けました。

## 13 心に深い傷を残した「信康事件」

「信康事件」とは、一般的には信康の妻、徳姫が父信長に対し信康やその母、築山殿の悪行を書き送り、怒った信長が家康公に二人の処分を要求したと伝えられます。

信康を「岡崎三郎」と呼称するのは、家康公の父広忠と同様で岡崎城主であったからです。

信康は永禄10年（1567）に元服、織田信長の娘である徳姫と結婚しました。元亀元年（1570）に家康公が浜松城に拠点を移すと正式に岡崎城主となり、3年後の天正元年（1573）には15歳で初陣を果たします。勇猛で、初陣の時も武田方の武節城（豊田市武節町）を攻めて火をかけるなど、武功を挙げました。さらに天正5年（1577）の遠江横須賀の戦いでは、退却する家康公本隊の殿を務めるなど大役を果たし、父の信頼も大きかったと言われています。

ところが翌年、信長から突然、信康の処断を求められました。その真偽については徳姫の訴状によるものか否か、今なお明らかではありません。結局、信康は岡崎城で家康公と面会した後、大浜城（碧南市）、堀江城（浜松市）、二俣城（浜松市）と転々と移され、自害をすることになってしまいます。

この年、家康公三男、秀忠が誕生し、のちに二代将軍になり、歴史の歎車は変わっていきました。

家康公は、徳川家の存続のために自らの命を絶った我が子のために、二俣城近くに廟所や位牌堂を建立、寺名を清瀧寺（浜松市天竜区）と名付けました。信康に、家康公のような深い用心深さが求められた事件でした。

## 14 「神君伊賀越え」の驚異

天正 10 年（1582）6月2日、本能寺の変で織田信長が明智光秀によって討たれました。家康公はその2日前から堺に滞在し、事件のことは堺を出て京都に向かう途中、京都から駆けつけた茶屋四郎次郎清延によって知らされます。知らせを受けた家康公は、京に戻って一太刀なりとも明智と戦い、松平家にゆかりのある知恩院に駆け込んで自害しようとしていますが、同行していた本多忠勝をはじめとする家臣たちに説得され、三河へ戻ることを決意しました。

そしてこの堺から岡崎城までわずか3日間（『家忠日記』）という驚異的なスピードで進んだ脱出劇のことを、後世「神君伊賀越え」と呼ぶようになりました。

この強行軍の裏には、服部半蔵正成をはじめとする伊賀者の協力、情勢を把握してゆく茶屋清延ら商人の手助けがありました。

また天正伊賀の乱で、信長に苦しめられた伊賀国の住人たちを、家康公がそっと置いたという経緯もあり、長い布石が危機を救いました。

無事岡崎に戻った家康公は時代を広い視野で判断し、京都に出ることはなく、信長死去により混乱する甲信地方の鎮定にあたったのです。

「御斎峠跡碑」  
(三重県伊賀市)

伊賀越えの際の最大の難所と言われる峠



## II 天下人への過程

戦いの中で大きく視野を広げ、天命に至る時

## 15 五カ国大名に

本能寺の変後、家康公は情勢不安定になっていた甲斐・信濃に向けて直ちに出兵します。そして、旧武田氏の諸将達を次々に帰属させて支配下に置いていきました。

徳川家の領地は、これまでの三河・遠江・駿河に加え、甲斐・信濃が加わり五カ国となりました。

## 16 野戦に強い徳川軍

### 一小牧・長久手の合戦

明智光秀を討った羽柴秀吉は発言権を強め、柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで破ると、いよいよ信長の後継者としての地位を固めていきました。家康公は秀吉の台頭に次第に危機感を持ち、信長の二男・信雄からの協力要請を受けて、天正12年（1584）小牧・長久手の戦いが起ります。

長久手の戦いでは、赤備えで有名な井伊直政らの活躍もあって大勝利します。この時、救援に向かう秀吉を本多忠勝がわずかの兵力で牽制し、秀吉を驚かせました。

この後は信雄が秀吉と和睦したことにより、家康公は戦の大義を失い戦いは終わりましたが、二男の於義丸（後の秀康）を秀吉の養子（人質）として差し出すことになりました。

ただこの戦いで「野戦に強い」徳川軍の存在を知らしめる結果になりました。

## 17 動かぬ家康公 一秀吉の一手

小牧・長久手の戦いで家康公を討つことができなかった秀吉は、武力ではなく、様々な手段を講じて家康公に臣下の礼を取らせようとしています。石川数正の岡崎出奔事件はこのようなときに起きました。この事件には様々な説がありますが、豊臣と徳川の衝突を避けようとした動きなのではなかつたとも推測されています。

天正 14 年 (1586) 豊臣政権を樹立しても上洛をしようとしている家康公に対し、秀吉は妹・朝日姫を離縁させ、築山御前を失って正室（継室）のいない家康公の元へ嫁がせました。家康公もこの申し出を断ることができず正室（継室）として迎えますが、それでも上洛をしようとはしませんでした。

そのため、秀吉はさらに朝日姫の見舞いという名目で生母である大政所までも人質として岡崎城へと送ります。さすがの家康公もこれには上洛しないわけにはいかず、大坂城で秀吉と対面し、臣従することになりました。

「朝日姫」  
(南明院蔵／京都市)



## 18 戦国の暮らしを変える 一家康公の郷村支配

天正 10 年 (1582) に本能寺の変が起り信長が倒れると、武田氏の旧領であった甲斐・信濃国では武田の遺臣たちによる一揆が頻発しました。家康公はこれらの一揆を鎮撫しながら、信州小諸城には大久保忠世、甲府城には平岩親吉、甲斐郡内には鳥居元忠らの重臣を配して次第に支配権を強めていきました。

しかし武力に頼る支配では領民たちの掌握はできません。そこで進めたのが「五ヶ国総検地」です。検地奉行には三河譜代の伊奈忠次を始め、今川遺臣の彦坂元正、武田遺臣の大久保長安が登用されました。秀吉による「太閤検地」と同様、耕作者を「名請人」として定め、年貢を直納させることで旧来の複雑な徵収を廃止しました。

また農民だけでなく、寺社や小領主毎に検地帳を作成し、隅々まで支配権の掌握に努めたのです。もう一つ画期的な内容として、「検地目録」を作成しました。

簡単に言えば、様々な状況を勘案した税の徵収制度です。この根拠にしたのが「七ヶ条定書」と呼ばれる細則で、例えば災害による収穫減に対する考慮、武士による人足などの制限、給金の給付などが記されています。

家康公は領民たちに対するきめ細かい政策によって、郷村の掌握を成し遂げていきました。力を持った者だけが横暴を許される、いわゆる戦乱の世の構造がこうして少しづつ変化していったのです。

## 19 八朔

天正 18 年（1590）、小田原の陣が終わると、家康公は秀吉により関東への移封を命じられました。家康公がまず手がけたことは、家臣団の配置でした。江戸につながる主要な街道の入り口には、井伊直政（上野国高崎）、榎原康政（上野国館林）、大久保忠世（相模国小田原）などの重臣を配置しました。

同時に江戸の町づくりにも着手し、武士団や職人たちの住居建設、それに伴う物資流入のための道路や水路建設など、狭小閑村であった漁業の村を変貌させていったのです。江戸城建設のために必要なことだったとはいえ、集住する人々の利便性を考慮した町割りやインフラ整備は、これまでの都市建設では見られないことでした。

後に世界一の大都市に発展した江戸では、家康公が江戸入りした 8 月 1 日を「八朔」の祝日として、様々な祝いの行事が催されたのです。



「徳川家康銅像」  
(岡崎公園)

江戸の方角を見つめる  
家康公

## 20 武士のあり方とは 一学問重視の狙い

家康公が考えた、戦のない平和な社会における「武士のあり方」には、深い思想が見えます。

まず武士に、政治の仕組みを作り、それを実行する行政的な能力を求めました。また、平和で安全な社会を守る倫理観を求めました。戦乱の無秩序な時代を繰り返さないためにも、このような新しい武士の姿が必要と考えました。

「武道の要は無道を討つにあり、善を正し、惡を滅し、民を恵み、人を欺かず、食を奢らず、慾を求めず、治國なりとて漫りに咎なき他国を討ち、戦を挑むは、無用の事也」

【家康公側近の井上正就が書き留めた記録から】

二度と戦の起こらない社会を創るために、家康公の考え方方がよく伝わってきます。

戦に明け暮れた時代の中で、ひとたび平和な社会が到来しても、これまでの武士たちの活躍の場がなければ不満も出てきます。秀吉による朝鮮への出兵に見られるような、いわゆる「ガス抜き」が行われたのも事実でした。

そのために家康公は学問を重視し、藤原惺窓から主に朱子学を学んだとされます。朱子学は人の道の正義を強く求める学問でもあり、武士道についても「惡を討つもの」と断じています。武功派と呼ばれた武士たちが次第に表舞台で活躍することではなくなり、平和な時代にこそ必要な武士の資質を学ばせたのです。それが学問です。

## 21 「決断」と「賭け」—関ヶ原の合戦

秀吉亡き後、家康公は直ちに朝鮮に出兵している大名に撤退するよう指示を出しましたが、異国との地という過酷な環境で、終わりの見えない戦を強いられていた豊臣大名らの不満は、筆頭の奉行であった石田三成に向けられました。

三成は加藤清正、黒田長政、福島正則ら7名の武将に命を狙われて家康公の屋敷に逃げ込む事態になります。家康公は三成を佐和山城に蟄居させることで事態の収拾を図りました。

天下分け目の合戦と呼ばれる関ヶ原の合戦ですが、もともと秀吉家臣たちの内部抗争から始まったのです。

ひとたび平和になりかけた社会が再び戦乱の時代に逆行する恐れのある中で、家康公は自分に従う武将たちをまとめ、三成を中心とする勢力の一掃を図りました。これが関ヶ原合戦の構図です。

慶長5年（1600）、関ヶ原の本戦は「小山評定」で家康公に従った豊臣大名を中心に戦闘しますが、井伊直政が先陣を切るなど徳川の武将たちも大活躍をしました。

小早川秀秋の東軍参加もあり、およそ半日で決着がつきましたが、家康公にとっては日本の歴史を動かそうとする大きな決断と、命懸けの戦いであったことも事実でしょう。

# III 天下泰平の国づくり

戦争のない平和な日本、そのカタチを求めて

## 22 慶長小判の意味

「びた一文出さない」

よく聞かれる言葉です。「びた」を漢字に直すと「鏹」。これは「悪い」という意味ですから、「悪い金一文でも出さないぞ」ということになるのでしょうか。この言葉、実は中世室町時代から頻繁に使われてきたものでした。

当時、日本国内で流通していた貨幣は、そのほとんどが中国（明國）から輸入された「明錢」でした。代表的なものが「永樂通宝」です。日本には国産の貨幣がなく、物の価格もその時々の貨幣の流通量によって定まりませんでした。

ここで出回ったのが「私鑄錢」。自分たちで勝手に貨幣を造ってしまおうという乱暴な手段でした。これらは粗悪なものが多く、「鏹錢」と呼ばれたのです。支払いに鏹錢が混じっていないかどうか、商取引では重要な作業となりました。当然経済は停滞し、物価は有つて無いようなもの。時の足利將軍家は鏹錢を選り分ける「撰錢」を禁止する以外方法がありませんでした。

織田信長が朝廷に献上した錢に「鏹錢」が多くあったというのは、これは朝廷を軽んじていたのではなく、当時としては仕方のないことだったと言えます。

「国づくりのために何をすべきか」

天下をほぼ統一した家康公が、幕府を開く前、慶長5年

## 24 国益を守る外交

(1600) に真先に手掛けたのが、国産貨幣の<sup>ちゅうぞう</sup>鋳造でした。これが「慶長小判」です。一刻も早く国内経済を安定させることを考えたのでしょう。

さらに慶長丁銀を鋳造し、慶長 14 年 (1609) には金 1 に対して銀 5 という交換比率も決定しました。

これによって市場取引はようやく安定した方向に向かい始めたと考えられます。

## 23 「駅伝」の始まり 一宿駅伝馬制度

「宿駅」<sup>しゆくえき</sup>とはもともと街道沿いの集落で、旅人を泊めたり、荷物を運ぶための人や馬を集めめておいた宿場のことです。

また「伝馬」<sup>てんま</sup>とは、幕府の公用をこなすために宿駅で馬を乗り継ぐ、その馬のことをいいます。そして、公用の書状や荷物を、出発地から目的地まで同じ人や馬が運ぶのではなく、宿場ごとに人馬を交替して運ぶ制度を「伝馬制」といいます。

伝馬制は古代律令制や戦国大名などによっても採用されていましたが、家康公によって本格的に整備されたものです。家康公は関ヶ原の戦い (1600 年) に勝つと、全国の街道の整備を始めますが、その皮切りとして翌年には東海道に宿駅と伝馬を設置しました。

これを「宿駅伝馬制度」と言います。「駅伝」の語源です。

関ヶ原の合戦で天下人としての権力をほぼ掌中に収めた家康公でしたが、それ以前から国のあり方として、当時の外交の課題に取り組んでいました。

「商船の去来は（中略）一足元の欲する所に隨うべし。訪域中の海浜陸路、賊徒を制禁す。万里海雲を隔つと雖も、交盟を堅くせん」慶長 4 年 (1599) に家康公からパタニ王国（タイ）に宛てた書簡の一部です。

第一の対外政策課題は日本の近海で海賊行為を働く倭寇の解体であったことが理解できます。

第二の課題は、ポルトガルによる「生糸取引」独占の解消です。当時需要の高まっていた高級な中国産生糸の輸入は、朝鮮出兵による明国や朝鮮国との国交断絶のため思うに任せない状況であり、ポルトガルが独占していたのです。価格も不当に上げられることが多く、幕府はその対抗手段として京都・堺・長崎の商人を中心に糸割符仲間をつくり、独占的に買い上げを行わせました（糸割符制度）。これにより不当な価格での取引は激減しましたが、根本的な解決にはなりませんでした。

家康公は何よりも明国や朝鮮国との交易が閉鎖されている状況を改善することが必要なことだったと考えたのです。

「糸割符奉書」  
糸割符の沙汰を示した  
奉書。本多正純と  
板倉勝重の連名である。



## まこと 25 信を通わせ 一朝鮮通信使

最も重要な外交課題であったとも考えられるのが、明国および朝鮮国との関係改善であり、交易の再開でした。二度に及ぶ朝鮮国への出兵は、結果的には失敗に終わり朝鮮国に多大な被害をもたらしました。

家康公は自国の兵たちだけでなく両国関係の将来も案じたのでしょうか。兵の「無条件即時全面撤退」という離れわざ業をやってのけたのです。

このことが後に伏見で朝鮮國義僧兵のリーダーであった松雲大師との会談を実現させ、「誼を交わし信を通わせ一」という善隣外交展開の起点となりました。

朝鮮通信使の招聘はその具体的な形として、歴史上に大きな足跡を残したと言えます。

## 26 立派な君主とは 一林羅山との問答

家康公の側近であった井上正就の記録の中に、藤原惺窓の弟子で家康公のブレーンとなった朱子学者、林羅山との興味深い会話が記されています。

「立派な君主とはいかなるものか」という家康公の問い合わせに対し、羅山は次のように答えました。

「六韜（中国の兵法書）に次のように書かれています。天下を独り占めするような君主はすぐに滅びてしまいます。天下は一人のものではなく、天下は天下万民のものです」

この言葉が家康公の遺言として引用され、枕もとに呼びよせた伊達政宗らの外様大名に語られました（『東照宮実記』）。

家康公は常にこのような政治哲学を持ち、平和社会の創造に尽力していた様子が伝わってきます。

## 27 善意の遺産「洋時計」

慶長 14 年 (1609)、フィリピンからメキシコへ向かうスペイン船が千葉県沖で座礁、遭難します。地元住民の協力によって乗組員 373 名のうち、前フィリピン総督ら 317 人の命が救われたと伝わります。彼らは歓待を受けた後、ウィリアム・アダムス（三浦按針）によって造られた船でメキシコへ帰ることが出来ました。

このお礼としてスペイン国王が使わした答礼使が持参した贈り物の中にあったのが「斗景（時計）」です。家康公はこの洋時計を大層気に入り、没後「神宝」として久能山東照宮に納められました。その結果、400 年以上前に造られた当時の部品をほぼ完全に残すこととなつたのです。技術的にも最高水準にあり、世界に類の無い貴重な宝物として注目を浴びています。

また、前総督がメキシコ出身だったことから、日本とメキシコの交流が始まります。明治維新後、不平等条約に悩んでいた日本が初めて対等な条約を結ぶことが出来た相手がメキシコであったことも、この縁に由来するのでした。このような友好関係も大切な宝物と言えるでしょう。

「スペイン国王から贈られた洋時計」  
(久能山東照宮蔵)



## 28 最後の戦い 一大坂の陣

豊臣の世の終わりを認められない秀頼の母 淀殿は幕府に従う気配はなく、大坂城には戦で身を立てられなくなつた真田信繁（幸村）らの浪人達が集まり、不穏な空気が満ちていました。

慶長 19 年（1614）、方広寺の鐘銘事件をきっかけに、家康公は大坂城を攻める決断をします。新しい平和な時代を迎えるためにも、大坂城に集結した不穏な浪人たちを抑える必要があったのです。

同時に大坂城に蓄えられた莫大な金銀を接収する必要もありました。新たな国産通貨の鋳造に不可欠な資源でもあったからです。

この年の冬と翌年の初夏にまたがった二度の戦いで、秀頼と淀殿は自害して果てました。農民から身を興し天下人となった秀吉の象徴でもあった大坂城は、戦国乱世の終わりを告げるかのように消えていったのです。

## 29 元和偃武と武家諸法度

大坂夏の陣が終結したのは慶長 20 年（1615）5 月、およそ 2か月後の 7 月に元号を「元和」と改めました。ここから本当の平和な時代が始まるという、家康公の並々ならぬ決意のほどがうかがえます。

「武家諸法度」はその具体的な武士たちの守るべき内容を定めたものであり、「禁中並公家諸法度」と並んで元和偃武

の宣言とほぼ同時に発令されました。特に次の点に注意して読んでみましょう。

### 一、文武弓馬ノ道、専ラ相嗜ムベキ事。

これは武士の行うべきことを述べたもので、「文武」という言葉は、新しい平和な時代の武士のあり方を示していると言えます。

### 二、大名・小名在江戸交替相定ムル所ナリ。毎歳夏四月中、参勤致スベシ。従者ノ員数近来甚ダ多シ、且ハ国郡ノ費、且ハ人民ノ勞ナリ。向後ソノ相応ヲ以テコレヲ減少スベシ。

この史料は三代将軍家光の時代の「寛永の武家諸法度」ですが、興味深いのは大名の参勤交代について、「相応ヲ以テコレヲ減少スベシ」と従者の数を減らすよう記していることです。大名たちの力を削ぐことだけを参勤交代の目的にしていたわけではなく、交代で江戸を守備させるためであるとか、また政策を日本の隅々まで行き渡らせる目的もあったと考えられます。

### 一、知行所務清廉ニコレヲ沙汰シ、非法致サズ、国郡衰整セシムベカラザル事。(領地での政務は清廉に行い、違法なことをせず、国郡を衰えさせてはならない)

### 二、道路・駅馬・舟梁等断絶無ク、往還ノ停滯ヲ致サシムベカラザル事。

武家諸法度の主な目的が「領民への善政」であったことがうかがえます。武士たちに、決して非法をすることなく、正しい政治を行うように求めています。これこそが新しい平和な時代を担う武士たちへの厳しい要求だったのでしょう。

# 30 平和を創る、国を守る

—神となった家康公

「りんじゅう臨終したならばこの体を久能山に葬り納め、葬儀を増上寺で執り行い、位牌は三河国大樹寺に立て、一周忌も過ぎた以降日光に小さな祠を建てて魂を勧請しなさい。死後も関八州の鎮守となろう」（元和ニ卯月四日『本光国師日記』）

家康公が亡くなる2週間ほど前、家臣たちに残した遺言の一部です。ここで興味深い言葉が「関八州の鎮守」になるという意志でした。「死後も日光山から関八州の鎮護をするぞ」という家康公の思いが、日光東照宮の建立につながつたのです。関八州鎮守の神としての「神号」について、梵舜（豊國神社の社僧）の主張する「大明神」と天津の主張する「大権現」が候補となりましたが、大明神は豊臣秀吉の神号でもあったので、大権現に定まったと伝えられます。さらに関八州鎮守ということから「アズマテラス」—「東照」という神名が選ばれ、家康公は神としての「東照大権現」と呼ばれるようになりました。

この「国を守る」家康公の強い意思は、西を向いて葬られた久能山の墓にも表されていると言われます。これは西国大名にらみを利かせるという意味ではなく、西方浄土に向かった魂が再び久能山に戻り、何度も国の平和を見守り続ける意志を意味しているとも考えられているのです。

# 終 おわりに

天下は一人の天下にあらず

戦後70年の今、私たちは家康公没後400年の節目の年を迎えていました。

日本の戦国時代は応仁元年（1467）の応仁の乱から慶長20年（1615）の大坂夏の陣までの148年と考えられます。この年、元和元年と改元。

家康公が産声を上げたのは天文11年（1542）。応仁元年から75年後、戦国のど真ん中に生を受け、艱難辛苦の75年の生涯を経て乱世に終止符を打ち、翌、元和2年に薨去されました。戦国148年の後半、75年が家康公の生きた時代です。

江戸時代が開き、民は待望の平和社会を享受し、東照大権現を仰ぎ安らぎの生活の中から日本文化が花開いていきました。

平和を悦ぶ民の中から家康公にまつわる伝説伝承も語られ、明治以降、真実か否かの論評もありますが、それ以上に大平和に導いた生き方と人間像、開いた国家像を熱い心で学びたく、その学ぶ姿勢こそ、日本の戦後70年、世界の今に生きる私たちが成すべきことだと思います。

「天下は一人の天下にあらず」

地球の上のすべての指導者に投げかけるこの言葉が家康公とともにあることを誇りに、「第3回家康公検定」に向かいたいと思います。

世界と日本の今、家康公に学ぶ時。

それが家康公400年祭です。